

## 「4コロニー周回軌道上砲撃戦」詳細ルポ 安土理庵

読者の皆さんの多くは、約一か月前の七月二十四日に起きたいわゆる「4コロニー周回軌道上砲撃戦」について連日の報道によってご存じのことだろう。様々な情報が新聞、テレビ、ラジオ、インターネットで飛び交っているが、実は、我が誌の取材班が事件の起きたその当日に砲撃戦を行った駆逐艦に乗り込んでいたのである。そこで、『スペース・ミリタリー』今月号では、その時駆逐艦に乗り込んでいた記者による詳細なルポを掲載することとした。いったいその時何があったのかをぜひ知っていただきたい。

事件が起こる五日前の七月十九日、我々取材班は日本連合帝国宇宙軍第二艦隊所属の駆逐艦「やまぎり」に搭乗した。当初の取材目的は、「日本所属のコロニー周辺宙域における警備状況の調査」であった。だが、目の前で砲撃戦を目撃することになるとは、その時点では思いもしなかった。

我々の搭乗した「やまぎり」は「あさぎり」級宇宙駆逐艦の五番艦であり、最新鋭の宇宙駆逐艦である。全長は二二〇メートル、総トン数は二五〇〇トン。巡航用プラズマロケットエンジンを二基、ブースト用液体燃料ロケットエンジンを四基搭載している。武装は五〇ミリレールガン二門、中型レーザー砲二門、小型レーザー機銃四挺、近接防衛レーザーシステム二門、ミサイル発射管六門を装備している。乗員は三〇名ほどであり、他国の宇宙駆逐艦と比べて少人数化が進んでいる。

二〇二〇年に中国が宇宙条約を破棄し、宇宙兵器の開発を進めた結果、各国もそれに対抗して宇宙兵器を開発し、今や宇宙は陸・海・空に続く第四の戦場となっている。我が日本も例外ではなく、旧日本国時代の二〇二四年にミサイル迎撃用レーザー衛星を打ち上げたのを皮切りに宇宙における軍拡を強化し、二〇六〇年にはコロニー及び月面植民地の防衛を目的とした国防宇宙軍 (Japan Defense Space Force : JDSF) が創設された。そして、それは二〇七〇年に第二次憲法改正が行われ日本国が連合国家たる日本連合帝国となつて以降も日本連合帝国宇宙軍 (Japan Union Empire Space Force : JUESF) として存続している。

本来、「4コロニー周辺宙域」の警備はコロニー警備隊及びコロニー軍艦隊が行うはずなのだが、二〇八五年の「4コロニー周回軌道上中国船衝突事件」以降、軍民を問わず中国船が多数接近しており、なかには航行中の日本国籍宇宙船に対し砲を向けてきた宇宙艦もあったため、現在では日本連合直属宇宙軍が警備を行っているのである。

同日、我が取材班の載る「やまぎり」は同型艦「ゆうぎり」とともに連合宇宙軍第二基地から発進、「4コロニー周回軌道」の内第四軌道の警備に当たることになった。航行期間は約二週間であり、その間に艦隊は「4コロニー」を二〇〇回以上に渡って周回することになる

はずだった。

宇宙軍は警備が必要なコロニー周回軌道を一〇個と設定しており、一つの軌道に常時二隻の駆逐艦からなる艦隊を警備につけている。

先に言ったように、「やまぎり」は最新鋭駆逐艦である。しかし、「4コロニー警備にはそれでも不十分であると艦長兼警備艦隊司令官の山中誠司中佐は語る。

「近年、中国所属の宇宙艦の接近回数は日に日に増してきており、しかも接近してくる宇宙艦はより強力なものになってきています。二年前までは主に軽装備の警備艦が主流だったのですが、一年前からはこれより重装備のフリゲート、そして現在はいより重装備の駆逐艦が主流となってきており、時々巡洋艦も接近してきます。中国の艦艇は重武装で知られており、これらの艦艇に対し最新鋭とはいえ駆逐艦二隻ではやや力不足です。せめて、あと一隻駆逐艦を増やしてくれたらありがたいのですが」

山中中佐は事件が起こる前、我々に対しそう語っていた。

基地を発進してから四日間は何事も無く過ぎていった。いつものように、平和であり、このまま二週間の航行期間を終えるのではないかと思われた。

だが、五日目の七月二十四日に状況は一変した。

その日の日本時間(JST)午前二時、我々は艦内に鳴り響いたサイレンで叩き起こされた。一体何があったのかさっぱりわからず、我々は困惑していた。そこで、我々取材班は乗組員に案内されてブリッジに向かった。

ブリッジは殺気立っていた。艦長に聞くと、正体不明の宇宙船一隻がコロニーの宙域に接近する軌道に乗っており、我々は「ゆうぎり」とともにインターセプトするのだという。我々は艦長に取材許可を取り、ブリッジにおいて取材を行うこととなった。

警報発令から三〇分後、いよいよ問題の船が見えてきた。

胴体にはつきりと五星紅旗が見える。中国人民解放軍宇宙軍所属の〇九三型宇宙駆逐艦だ。〇九三型宇宙駆逐艦の全長は一七〇メートル、総重量は四〇〇トン、武装は七〇ミリレールガン三門、大型レーザー砲二門、対空レーザー四門、ミサイル発射管八門。中国の最新鋭宇宙駆逐艦がコロニーに向かって接近しているのだ。

直ちに警告が日本語・英語・中国語・ロシア語の四ヶ国語で行われた。

「警告！ 我々は日本連合帝国宇宙軍である。貴艦は日本所属コロニーの領有宙域に接近している、速やかに軌道変更し、当宙域から離脱せよ！」

しかし、中国艦はコースを変える気配を見せない。それどころか、このような返答を返してきた。

「当艦は現在中国の領有宙域を航行している。そちらこそ我が国の宙域より離脱せよ」

この中国艦の主張には中国なりの理由がある。現在中国を除くコロニー保有国間で結ば

れている国際条約では本来、各コロニーの領有宙域というのはコロニーから半径一〇〇キロの球体状の空間を指すのだが、中国は半径二〇〇キロを主張しているのである。

日本の「4コロニー」と中国の「4コロニー」は第四ラグランジュ・ポイント、すなわち「4」をそれぞれ近点一〇〇キロ・三五〇キロで周回している。軌道同士は二五〇キロの差があり、軌道傾斜角も違うためコロニー自体が衝突することはないが、双方の主張する領有宙域は交差することがあるのである。

この日は、ちょうど領有宙域が交差する日であった。

双方は警告に警告で対応し、全く譲らなかつた。この状況が約二時間にわたって続いた。

午前四時三〇分頃、とうとう中国艦がコロニーの領有宙域を侵犯した。

これに対し「やまぎり」及び「ゆうぎり」は威嚇射撃を行うことを決定。射撃警告後、直ちに威嚇射撃が行われた。

威嚇射撃は船体側面に装備されている小型レーザー機銃で行われた。万が一命中しても相手に被害を与えないようにレーザーは低出力かつ目視できるように可視光線で照射するように設定され、中国艦の前方200メートルへ向けて照射された。

この威嚇射撃は確実に中国艦に目視されているはずであったが、中国艦は全く反応せず、そのままのコースで航行を続けた。

午前五時、驚愕の事実が発覚する。

なんと、中国艦がこのままのコースを取った場合、「4コロニー」と衝突する可能性が大だというのだ。コンピュータをはじめ出した計算結果によると、「4コロニー」への衝突確率は八〇パーセント以上、衝突予想時刻は五時間後だった。ただのアステロイドやデブリが衝突しただけでも、コロニーは重大な損傷を負う。ましてや、今回の相手はミサイル等の弾薬を満載した駆逐艦である。もし衝突すれば、コロニー崩壊という大惨事をまねく可能性がある。

艦長は重大な決断を下さなければならなくなつた。

最終的に艦長が下した決断は次のとおりである。

まず、中国艦に対し再度警告を行う。次に、射撃警告を行った後、船体に対する低出力レーザー射撃を行う。そして、万が一これに対しても反応がなかつた場合、「やまぎり」「ゆうぎり」両艦が搭載する全火力をもって中国艦を木っ端微塵に撃破する、というものだった。山中艦長は「ゆうぎり」艦長の松本勲中佐にこの決断を伝え、松本艦長も同意したためこのプランが実行されることになった。

まず、再度の警告が行われた。

「警告！ 貴艦は我が日本連合帝国所属コロニーの宙域を犯し、さらにコロニーに対する衝突コースに入っています！ このままでは衝突します！ 直ちにコースを変更し、宙域

から離脱しなさい！」

が、中国艦はなおも反応なし。

とうとう船体射撃を行うこととなってしまった。射撃警告が行われる。

「これより貴艦に対する低出力レーザー射撃を行います！ 直ちに軌道修正を行い、現在の軌道から離脱しなさい！」

だが、反応はない。

艦長はレーザー射撃の命令を下した。

四門あるレーザー機銃のうち、右舷に装備されている二門からレーザーが照射された。「ゆうぎり」の左舷からもレーザー照射が行われる。レーザーは中国艦の装甲をうっすらと焼いていくが、艦の航行に支障を来すほどではない。

そして、レーザー射撃を開始してから一分後、中国艦がバーニアを噴射し軌道を変更した。艦の乗組員一同、ほっと胸をなで下ろした。

だが、次の瞬間だった。

一〇キロほど距離が離れた時だったろうか、中国艦が突如としてこちらに向けて回頭し、レールガンを発射してきたのである。

騒然とする艦内。レールガンは五発が発射され、内一発が「やまぎり」をかすめた。かすめた衝撃で船体が大きく揺れる。

だが、「ゆうぎり」の方が更に深刻であった。残りの四発中二発が液体燃料ロケットエンジン一基に命中、エンジンが大爆発を起こしたのだ。液体燃料に引火し明々と燃え始める「ゆうぎり」。炎上したエンジンモジュールが切り離され、消火作業が行われつつあるものの、爆発の衝撃で姿勢が崩れ、スピニングしている。戦闘は困難だ。

山中艦長は司令部に攻撃されたとの旨を報告するとともに、正当防衛による反撃を命令。中型レーザー砲による砲撃を指示した。

直ちに中型レーザー砲二門による砲撃が開始された。強力なレーザーが今や敵艦となった中国艦の船体をえぐる。しかし、敵は対レーザー用の装甲を起動したようだ。これは、現在一般的になった装甲で、太陽電池を応用したものである。すなわち、高エネルギーに耐えられる太陽電池を用いてレーザーを吸収し、電力に変換するというものである。この装甲により、こちらのレーザー攻撃は無効化されてしまった。

レーザーによる攻撃の効果が薄いと判断した艦長は、レールガンによる攻撃に切り替えることを決断。レールガンの照準が行われ、発射された。

発射されたレールガンの砲弾は七発。そして、内五発が敵艦の船体中央部及びプラズマロケットエンジンに命中。敵は大損害を負い、航行不可能になったと思われた。

だが、敵艦はこちらの攻撃を受けた直後に搭載するミサイルの全弾を発射した。

八発のミサイルがこちらに向かってくる。直ちに全自動の近接防御レーザーシステムが

作動し迎撃を始める。一発、また一発と撃墜されていく。だが、数が多く、対処しきれない。

最後の一発が我が艦に迫った。死を覚悟する乗員たち。そして、我々取材班もそうであった。

だが、次の瞬間。

どこからともなくレーザーが飛んできてミサイルに命中、ミサイルは爆発した。

一体どこから飛んできたのか。我々はあたりのモニターを見回した。

すると、一つのモニターに戦闘不能に陥ったはずの「ゆうぎり」が写っていた。

どうやら、なんとか姿勢制御に成功し、戦闘可能状態に回復したようだ。そして、その中型レーザー砲でミサイルに照準を定め、撃墜したらしい。なんとという神業だ、と我々は感嘆した。

直ちに反撃に移る。両艦はその保有する全ミサイルを敵艦に向けて発射した。合計十二発のミサイルが中国艦に向けて飛んでゆく。

直ちに敵艦も迎撃に移るが、数が多すぎて対処しきれない。

一発、二発と命中していく。

そして、三発目が命中したとき、中国艦は大爆発を起こし、木っ端微塵に吹き飛んだ。

乗員は皆呆然としていた。

艦長は「みんな、よくやってくれた」といったが、彼の顔にも笑顔はない。

何しろ、攻撃してきたとはいえ隣国の宇宙艦を撃沈してしまったのである。国際問題、下手をすれば戦争にもなりかねなかった。

両艦は基地に帰還し、他の艦が代わりに警備任務についた。

結局、なぜ中国艦がコロナーとの衝突コースに入ったのか、なぜ攻撃をしてきたかはよくわかっていない。ただ、後日の情報によれば、当該の〇九三型宇宙駆逐艦の艦長は中国宇宙軍の中でもタカ派として知られ、度々日本に対する攻撃を主張していたという。衝突コースに入ったのも、日本側に先に攻撃させ、戦争の口実を作るためだったとも言われる。だが、真相がどのようなものかは不明である。

この事件の結果、日中関係はさらに緊迫した。中国は駆逐艦が撃沈されたことに対して怒り、日本を名指しで非難した。また、中国国内では反日デモが多発した。中国軍の活動は更に活発化し、コロナー付近には巡洋艦が頻繁に現れるようになった。

これに対し日本も中国を非難、対中国の防衛体制を強化した。普段デモなど起こらない日本でもデモが頻発した。

コロニー及び月面都市では戒厳令が敷かれた。コロニー内では「中国が攻めてくるかもしれない」という市民の不安の声が多数聞かれた。かくいう私も、不安で夜眠れなかった。

結局、国連の仲裁で戦争には至らず、戒厳令も今では解除されている。しかし、今後中国に対し毅然とした態度を取らなければ、いずれ第二・第三の事件が起こり、やがて全面戦争に発展するだろう。

(了)